

なんかチート能力を持った三人がFT世界に殴りこむ話

アイソー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通りです。

FAIRY TAILの小説が少なくてむしやくしやして書きました。

反省も後悔もしています。

目次

プロローグ	1
最初がお前か	6
話はきちんと聞かないと後で痛い目を見る	16
まず話すべき	25

プロローグ

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

「——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——」

「ちくしょう……『ガンド』しか出ない……爆死だ……」

「いい加減、十連ガチャの度にそれ言うのやめない？ しかもこんな公共の場で」

目の前の友人がスマホを持ったまま突っ伏す。あれだけノリノリで詠唱まで言ったのに、盛大に爆死したようだ。石もつきたようで、落ち込み具合が凄い。

ただ爆死するのはいいが、こんな喫茶店であんな詠唱を言うのはやめて欲しい。自分を含め三人で席に座っているのだが、自分達三人を見る店員さんの視線が痛い。

しかも道路側が一面ガラス張りのオシャレな喫茶店なのだ。他のお客さんがいないのが幸いだ、肩身が狭い。

「でも前に詠唱した時にはメルト出てくれたし……」

「あれお前七万課金してたじゃねえか。詠唱関係なく、マネーパワーだから」

ちなみにこの友人は廃課金者だ。大学の合間にバイト——いやバイトの合間に大学へ行く生活をして、稼いだ金は殆ど課金に使っている。

「こうなれば、また課金をするしか……」

「……落ち着け」

さらに課金地獄に陥りそうな友人をもう一人の友人が止めに入る。こいつは詠唱している間も一人静かにコーヒーを飲むぐらいクールな奴だが、仲間思いのいい奴だ。

「課金以前に……ギルガメッシュを呼ぶには、触媒が足りない……」

ただ悪ノリするのが玉にキズだ。

「それもそうだ……そうなると世界で初めて脱皮したヘビの抜け殻が必要か……」

「落ち着け！　せめてギルのファイギュアとかにしとけよ！　てかAmaz〇nで探してもヘビの抜け殻とか売ってないから！」

「……やっぱりこいつ、アホ」

「お前のせいでアホが暴走しているんだから、止めるの手伝えよ！　優雅にコーヒー飲むな！」

「素に銀と鉄。礎に——」

「なんかもう課金してる!?!」

大学の講義の空いた時間。

趣味の合う友人三人でグダグダする時間。

とても建設的ではないがとても楽しく居心地が良く、この時間をもっと続けばいいなと思っていた。

しかしそんな時間も唐突に終わりを告げる。

「は？」

「――汝の身は我が下に、我が命運は――え？」

「な！」

ガラス張りの壁から、大型のトラックがこちらに突っ込んで来ているのが見えた。

そして逃げる間もなくトラックが喫茶店に突っ込み、そこで自分の意識は消えた。

「おっす、ちわっす、ちやっす。神様な存在だよ」

そして目が覚めると、目の前にシルバーのアクセサリー沢山つけた、何やらチャラチャラした男がいた。

慌てて周りを見ると、一面真っ白の空間で、両隣には二人の友人達がいた。そして三人とも何故か正座をさせられている。動かそうと思っても、体はピクリとも動かない。

「唐突ですが、現世での生を終了した三人には、別の世界に行ってもらいまーす。こっちの暇つぶしの意味で」

……これ、俗に言う神様転生的な感じではないだろうか。目だけ動かして両隣の友人を見ると明らかにソワソワしている。二人も同じ事考えているようだ。

「あ、ちなみに喋られると面倒くさいから全員喋れないようにしているからね。さーて、三人が行く素敵な世界を決めようかー」

神？ が手を叩くと、目の前のダーツボードが現れる。ダーツボードにはいろいろ漫画やアニメのタイトルが書いてある。ただ字が細かく、数が多すぎて全部は把握しきれない。

「はい、パジエロ、パジエロー」

神？ の言葉と同時にダーツボードが回転する。そしていつのまにか持っていたダーツを適当に投げた。ダーツが当たると、ボードの回転がゆっくりになっていく。

「FT……FAIRY TAILの世界に決定だー」

行く世界が決まった。しかし正直FAIRY TAILはあんまり知らないのだが……。

「この前漫画は六十三巻で完結したよー。アニメもやるからよろしくねー」

え、なにそのステマ。

「じゃあ三人には早速にはFT世界に行ってもらおうか。勿論、皆にチート能力あげちゃうぜー。どうせだし、好きな作品の能力上げようかー」

神？ が俺達三人の頭を順番に触っていく。

俺の頭が触られると、唐突に頭に言葉が浮かぶ。

『金色のガッシュ!! の全ての魔物の呪文使用能力』

テラチートやん。

しかし何故にガッシュなのだろうか。確かに好きだけど、古くない？

……そういえば一昨日ゲ○で借りて全巻一気に読みしたな。あれが原因か？

「それじゃーそろそろ行こうかー」

そう言うと、自分達の頭上に巨大なハンマーが出現する。赤黒く汚

れ、なんとも禍々しいハンマーだ。

それを見て顔から血の気が引く。多分両隣の二人も同じ思いの筈だ。

しかし、転生するのに痛いなんて話は聞いた事は――。

「大丈夫、痛いのは一瞬だよー」

え、痛いの、あれ。

「それでは新世界にレッツゴー」

瞬間、ハンマーが降ってくる。

こうして俺達は違う世界に旅立った。激痛と共に。

最初がお前か

「痛え……」

激痛と共に目を覚ますと、俺は森の中にいた。

服装も自分がさつきまで着ていたものとは違い、自分の体にも違和感を覚える。どうやら体も前世のものとは変わってしまったようだ。地味に背も縮んでいるし。鏡がないので顔は分からないが。

周りを見渡すと、あとの二人の姿は見当たらない。他の場所にいるのだろうか。

ともかくまずは自分の能力とやらを試してみようか。

「ザケル！」

俺が呪文を唱えると、手から雷が出て目の前にあった木を倒す。

おお、何か感動する。

威力はファワードで覚醒する前のガツシユくらいだが、放出方法はゼオンと一緒に。呪文を唱えるたびに一瞬気絶するのは地味に厄介なので、こつちの方が助かる。

「ギコル！」

別の呪文を唱えると今度は手から氷の塊が発射される。これも原作では口から放出されていた筈だが、どうやら全て手から変わっているようだ。

「ラシルド！」

「ジゲルド！」

「ザケルガ！」

「ラウザルク！……ん？」

その後次々と呪文を試していくが、ラウザルクだけ発動しなかった。身体強化系だからだろうか？

「ドルク！」

試しに他の身体強化系の呪文を唱えるが、問題なく発動できた。発動した状態で木を殴ると、簡単に木が折れた。

ならば、呪文の威力の問題かもしれない。

「ギガノレイス！」

ドルクを解除し、別の中級呪文を唱えるが、これも発動しない。どうやら俺はまだ全魔物の初級レベルの呪文しか使えないようだ。

あと呪文を唱えると何かを消費するようだ。唱えただけなのに体が妙に疲れる。原作ではパートナーの心之力を使って魔物は呪文を発動していたが、俺も何かを消費している。FAIRY TAILの世界だし、魔力だろうか。

「ふーん。貴方は金色のガッシュの能力ってわけね」

いろいろと能力について試していると後ろから声をかけられた。

「ま、貴方三日前に読んでいたし、それに影響されたのかしら」

振り向くと一人の少女が立っていた。青の長い髪に長い袖の前が全開のコート。足裏と膝に棘がついた装備。

そしてなによりも、股間についている前貼りのような下着。てかほぼ丸出し。てか痴女。

「てかメルトリリス？」

俺の目の前にはFateシリーズのキャラクターのメルトリリスが立っていた。

FAIRY TAILには存在しないキャラなのでつまりは、そういう事なのだろう。

「ええ。確かにメルトリリスは私の好きなキャラだったけど、まさか私自身がなるなんてね……。確かに七万も使ったけど、まさかTSするなんて……」

このメルトリリスの中身は俺の友人だ。流石に公共の場でサー

ヴァント召喚の呪文を唱えられるような奴でも、TSしたのはメンタルに来たらしい。

「まあいいわ。こんな完璧な体に生まれ変わったのだもの。感謝こそしても、不満なんか言つては罰が当たるわ」

しかしすぐに切り替えられたようだ。

口調といい、なんだかメルトリリスに引つ張られている印象を受ける。

「なあ……なんかお前メルトリリスに引つ張られてないか？ 女言葉も不自然なく使うし」

「そうね……正直『俺』だった部分が少ないような気がわ。実は『俺』の名前も貴方の名前も思い出せないし、今は『私』の方がしっくりきている。『俺』の記憶はわりと思いつけるのだけでもね」

どうやらこの友人は相当キャラクターに引つ張られてしまっているようだ。

しかしそこで俺も自分の名前も友人達の名前も思い出せない事に気が付いた。

「あら、どうやらあなたも引つ張られているようね。高嶺清磨に」

どうやら俺は金色のガッシュの主人公の一人、高嶺清磨になっているようだ。

思えばこんな異様事態でも冷静に能力を確認しているあたり、俺も清磨に引つ張られているようだ。

「まあ貴方は元からツツコミ担当だし、顔芸もよくするからあんまり変わりないわね」

「いやいや、あんなレベルの顔芸した事ないから。それより後はあいつだけ——」

「どうやら待たせてしまったようだな」

再び後ろから声をかけられ、二人で声した方を向く。

そこには学ランのようなものを着た大男が立っていた。

「てか空条承太郎?」

完全にジョジョの奇妙な冒険の三部の主人公、空条承太郎だ。

これまた中身は友人なのだろう。きっとキャラクターに引つ張られてはいるだろうが。

「またあんまり前と変わらないわね……私なんか性別も変わっているのに」

「そこは運だろう。ちなみに俺の能力は全スタンド能力だ。まだ全部使えるわけではないがな……」

友人——承太郎の前にスタンド、スタープラチナが出現する。

どうやらスタンドはスタンド使い以外でも見えるようだ。てか全スタンドってチート過ぎない?

「私はFateキャラの全スキルと宝具の使用。ただ制約は私がFGOで持っていたサーヴァントだけっていう縛りね。おまけにまだ全員は使えないみたい」

そのまま友人——メルトリリスが自分の能力の説明を始める。

これまたえぐいチートだな。なんか自分の能力がちつぽけに思えてきた。

「俺は金色のガッシュ!! の魔物の全呪文だ。しかもまだ初級ぐらいしか使えない。なんか二人と比べると見劣りが凄いな」

「……答えを出す者(アンサートーカー)の能力は? 高嶺清磨は持っていたはずだが……」

「ないんじゃないか? 最低でも今は使えない」

ちなみに答えを出す者(アンサートーカー)は高嶺清磨が持っている能力で、どのような状況、どのような問題に対しても答えが出せるという能力だ。問題を見れば頭に答えが浮かぶという、全国の受験生が欲しい能力だ

「ともかく今は方針を決めよう。まず名前なんだが、誰も思い出せないなら各自のキャラクターの名前を使おうと思うのだけど、どうだろう」

とりあえず、三人そろったので、これからの話を進めていく。

「そうね。それにこの体でメルトリリス以外を名乗りたくないわ」

「俺も異論はない。出来ればジョジョで頼む。次FAIRY TALE Eをきちんと読んだこと——」

こういつた流れで話し合いは行われた。結果として決まった事、分かった事は以下の通りになった。

- ・ 誰もFAIRY TALEをきちんと読んだ事はない。しかもうる覚え。
- ・ 妖精の尻尾に入るかは保留。
- ・ 自身の能力を鍛える事が必要。
- ・ 情報の入手が必要。原作の開始は784年？
- ・ 何より金が要る。

こうしてひとまずの方針が決まり、森を抜けて街に向かおうという話になった。

ちなみにジョジョのエアロスマスを先行させている。エアロスマスのレーダーなら人の密集している場所も近づけば分かる。

「そんな訳で街に向かっているのだが……メルト、足のやつどうにか出来ないか？ 街だと目立つと思うんだけど」

「それもそうね」

半場諦め気味で言ったのだが、どうにか出来る手があったようで、メルトの足周辺が光り、光が収まると普通の足が現れた。靴もきちんとして履いている。

「この世界でいう換装って魔法らしいわ。異空間からの武具を取り出したりしまったりする魔法で、使いたい英霊の宝具もこの魔法で取り出すの」

「確か原作ではエルザ・スカーレットが使っていたな……」

「へえー、王の財宝みたいな感じか」

何気ない発言だったが、メルトは嫌そうに顔をしかめた。

「まあそうね。……あの金ぴかと同じってそれはそれで嫌ね」

こいつは元々ギルガメッシュ結構好きだった筈だが、メルトの影響が相当強いようだ。性転換しているというのも影響が大きいのかもしれない。

「結局ガチャも当たってないし」

あ、根本はまだ平気そうだ。

「それにしても歩くだけって暇ね。何かハプニングでも起きないかしら……」

「平和でいいじゃないか。変な問題が起きたら面倒くさいぞ」

「それもそうなんだけど——」

「二人とも止まれ」

メルトと何気なく話していると、ジョジョから静止をくらった。

「エアロスミスのレーダーに反応があった。人が十五人この先で固まっている」

ジョジョがプロペラで浮いているスカウターのような装置を確認しながら話す。あれにはエアロスミスのレーダーで捉えた人の位置情報がのっている。

しかし十五人とはまた微妙な数だ。

「街や村ってわけではなさそうね。商隊かしら？」

「分からないが行ってみよう。何にせよ、人と話せる」

「おお？ 何だ、ガキが三人もいるぞ？」

「アジトを見られて生きて返す訳にはいかねえな」

「ヒビ、運がないねえ……この黒槌盗賊団のアジトを見ちまうなんてよお」

人の集団は盗賊団でした。剣やら槍やらで武装している薄汚れた男達が、掘立小屋からぞろぞろ出てくる。

「何と言うか……」

「テンプレだな」

なんとというか、こんな絵に書いたような盗賊たちが実際にいるんだな。

「ま、こうなったら戦闘ね。まずは私にやらせて」

そう言つてメルトが前にでる。すると盗賊たちは一斉に笑い声を上げた。

「おじようちゃん、なんだその恰好は！ 痴女かよ！」

「色仕掛けするならもうちよい胸が欲しいな！」

「そんなんじや変態のおっさんしか喜ばねえよ」

言われたい放題だな。流石に怒るかと思つたが、メルトは可哀想な物を見る目薄く笑う。

「あら、これは貞淑に隠しているのよ。美的感覚のないも愚図には分からないでしょうけど」

いや、俺らから見ても痴女だと思う。

そのままメルトはその場でクルクルと回転を始める。すると先程のようにまた光が集まり始めた。

「換装：『貴方のためのプリマ（メルトリリス）』」

光が消えると、再び鋼鉄の棘が生えた具足を身に着けていた。

「臓腑を灼くセイレーン！」

そのまま近くにいた盗賊の飛び膝蹴りを食らわせる。盗賊は棘に貫かれ、そのまま吹き飛ばされた。

周りの盗賊たちは何が起こったか分からず茫然としていた。

「ふふふっ……アツハツハツハ！」

「な、何なんだこいつ！」

そのままメルトは笑い声を上げながら盗賊を蹴り、刻んでいく。戦闘というか、蹂躪だ。

「オラア！」

「ガロン！」

「うぎやあー！」

更に遠距離からメルトを攻撃しようとする奴はジョジョのスタープラチナと俺に潰される。

盗賊十五人は、五分たらずで全滅した。

「お、覚えてろよ……ボスが帰ってくればお前らなんか——」

「あら、まだ喋れたの。じゃあいろいろ喋ってもらおうかしら。この国の名前は？」

「は？ 何でそんなぎやあああ！」

「質問の答えと悲鳴以外で口を開かないでちょうだい。……動けない相手を徹底的に甚振る……堪らないわね……」

「よし、ジョジョ。話を聞くのはメルトに任せて俺達は建物に何かないか探そう」

「……了解した」

ジョジョはメルトの所業に何か何か言いたげだが、あれには触れない方がいい。死ぬ事もないだろうし、相手も悪人だ。

……完全にあいつはメルトリリスになってしまったな。今やガ

チャが好きなメルトリリスって感じた。

「汚いな」

小屋の中は非常に汚かった。酒の空き瓶はそこら中に転がっているし、武器も床に散乱している。

「あまり整理をしていないようだな……盗品も無造作に置かれている」

何やら金貨やらが入った箱が蓋が空きっぱなしで放置されていた。流石に無防備すぎる。

「とりあえず、何か情報がありそなものを探そう。新聞とか——」

「二人とも！ 今すぐ小屋を離れなさい！」

外からメルトの声が響く。

入口も遠かったので、二人で壁を壊して外に出る。

そして小屋が吹き飛んだ。

「くそ、一体なんだ」

悪態をつきながら、小屋があつた場所の前方を見ると、メルトと見知らぬ男が対峙していた。

「何者よ、あんた」

メルトの刺すような視線にも男はブレる事なく、不敵な笑みを浮かべる。

「ギヒッ。俺は鉄竜のガジルだ」

話はきちんと聞かないと後で痛い目を見る

「鉄竜の……ガジル……？」

粉碎された小屋の破片がパラパラと落ちる中、俺達三人鉄竜のガジルと名乗った男と向かい合った。

いきなり攻撃されこちらは警戒し、向こうはただニヤニヤと笑う。次に何が起きるか分からない状況だ。

「……何かこいつ見た事あるんだけど……原作キャラか？」

緊迫した空気ではあったが、俺にはどうもこいつに見覚えがあった。小声で二人にだけ聞こえるように確認する。

「さあ？ 私原作キャラは可愛いキャラしかまともに覚えてないもの。多分貴方の方がちゃんと読んでいるわよ」

「俺もちゃんと読んだっていうか、アニメで見たのは呪われた島とかの辺りまでだからなあ……」

メルトはなんなら原作をもとにも知らないようだ。

俺も途中までしか見てないのであまり知らない。こいつに見覚えがあるのも、本屋の置いてある表紙でこんな奴いたかな、ぐらいの認識だ。

「使えないわね……それでもオタク？」

「自分も分かってなかったじゃねえか」

「私は可愛い女の子愛でればそれで良かったから」

「その恰好で言うとなんか変態度が増すな……」

「鉄竜のガジル……確か妖精の尻尾に入っている、物語の主要キャラだ。主人公と同じ種類の魔法、滅竜魔法が使える」

俺とメルトでグダグダな話をしていると、ジョジョが解説を入れて

くれた。一番原作を読んでいたので頼りになる。曖昧な部分も多らしいが、俺とメルトよりマシだ。

「超メインキャラじゃない。どうするの？　ここで戦うの？」

「……向こうは逃がしてくれそうな雰囲気はないがな……」

ジョジョの言葉で改めて見ると、ガジルは好戦的な目でこちらを見ていて、一挙一同にも反応している。

多分逃げるそぶりを見せれば、すぐさまに攻撃が来る。

「鉄竜のガジルって言ったか……何で俺達を攻撃する？　お前もこの盗賊団の仲間か？」

とりあえずガジルの事は知らないという事で話を進める。それでも俺達の会話良く待っててくれたな。

「あ？　違えよ。俺はただギルドでこの盗賊団を潰す依頼を受けてきただけだ。それでここのボスをシメてアジトの場所を聞いて来ただけだ。てかお前らが盗賊なんじゃねえのか？」

話を聞く限り、どうやら誤解があったようだ。ガジルは俺達が盗賊団の一味だと思っっているらしい。

こらなら話し合いで解決できる。

「それなら俺達は戦う——」

「まあお前らが盗賊だろうとそうでなかろうとどうでもいいんだよ、この際」

「いや、でも——」

「さっき戦った盗賊のボスが雑魚過ぎて消化不良なんだよ」

あれ？　なんか不穏な空気。

説明を何も聞いて貰えない。しかもガジルの目がどんどんギラギラしてきてる。

え？　もしかして戦闘狂よりな人？

「だから遊ぼうぜ。鉄竜棍！」

案の定、ガジルは俺達を攻撃してきた。

腕を鉄の棒に変え、こちらに猛スピードで突っ込んでくる。

「セウシル！」

咄嗟に防御呪文を唱えると、俺達の周囲を光のドームが包み込んだ。

セウシルはそれなりの防御力はあるし、周囲全体を防げる良い防御呪文だ。

「ギヒッ」

「ウソだろー！」

しかしガジルの攻撃が当たると、一瞬拮抗したがすぐにセウシルが砕けた。

ガジルの攻撃力は相当なものようだ。食らうのはマズい。

「まかせろ」

一瞬拮抗した間に、ジョジョが前に出る。そしてガジルの目の前に立ちはだかった。

「20th センチュリー・ボーイ」

ガジルの攻撃が当たる瞬間、ジョジョはマスクと肩が一体化したようなスタンドをかぶる。

「あ？」

そのままガジルの攻撃が当たると、ジョジョは微動だにしない。

確かあれは完全防御のスタンドだ。かぶっている間は衝撃を地面に伝え、一切のダメージを負わなくなる。ただデメリットとして身動きがとれなくなるが、仲間がいる今なら問題ない。

「ザケルガ！」

「踵の名は魔剣ジゼル！」

俺が少し強めの電撃を放ち、メルトも足から衝撃波を飛ばして遠距離から攻撃する。

「ラドム！」

最後に俺が爆発する光弾を放ち、爆炎が起こった隙に距離をとる。ジヨジヨもスタンドを解除して離れたようだ。

しかし、この程度でやられたら、世話はないだろう。

「鋼鉄の鱗は全ての攻撃を無力化する」

煙が晴れると、全身が鉄の鱗に覆われたガジルが現れた。今の攻撃でも傷一つない。

「面白い魔法使うが……威力が足らねえな。まるで蠅みてえだ」

やはり初級呪文では圧倒的に火力が立ちない。せめて中級呪文が使えればいいのだが。

……いや、一つあいつに有効な呪文があった。

「そんなに痛い一撃が欲しいなら、くれてやるわよ」

挑発に乗ったメルトが、不機嫌そうにその場で回転し、また光が集まる。

「換装：『恋を知った少女（パッションリップ）』」

足の具足が消え、今度は両手に巨大なかぎ爪が現れた。その巨大さは人を軽く包み込める程だ。

今メルトはかぎ爪で体を支える状態で、足は完全に宙に浮いている。

これはメルトリリスの姉妹、パッションリップの装備だ。強力な怪力とZカップ越えの胸を持つ怪物みたいな少女。

メルト自身の姿は変わっていないので、使いたい英雄の装備だけを身に着けるらしい。

確かにこの装備なら、ガジルにダメージを食らわせる事が出来るだろう。

スピードが遅い事が欠点だが、それなら俺の有効な呪文が役に立つ。

「凄い武器だがそれだけデカいのをちゃんと当てられるのか？」

「それは俺がカバーする。ジケルド！」

呪文を唱えるとスピードの遅い光球が手から発射された。

「あ？… こんなの当たる訳ないだろうが。くだらねえ」

ガジルはジケルドをを簡単に避ける。

だがこの呪文は対象に当てる必要がない。ジケルドの光球は萎み、とうとう消えた。

「は？… な、何だこれは?!」

そしてその瞬間、ガジルが宙に浮いた。そして引き寄せられるように急速にメルトに向かっていく。

「あれって……対象を磁石に変える呪文だっけ？」

「そうだ。今はメルトを磁石に変えたから、鉄の皮膚のあいつは何もしないでもこっちに突っ込んでくる」

「チッ！… なら皮膚を解除するだけ——出来ない!」

会話を聞いていたガジルが鉄の皮膚を解除しようとしているが、出来ないうだ。正確に出来てはいるのだが、解除した側からすぐに鉄の皮膚に戻っている。

「スタンド、メタリカ……鉄を操れるのはお前だけではない」

ナイス、ジョジョ。

そのままガジルはメルトの射程圏まで近づいた。

「吹き飛びなさい！… ヨカナーンを籠に！」

「グハッ！」

メルトのかぎ爪に風ぎ払われ、ガジルが吹き飛んでいく。そのままいくつも木を折りながら、ガジルは森の奥に消えた。

鉄の皮膚があるので死にはしないだろうが、大ダメージは免れない筈だ。

「しかし、原作キャラに手を出してしまっただけ、大丈夫か？ 面倒な事に巻き困らないといいんだが……」

確か妖精の尻尾って仲間意識が強いから、下手に手を出すと危なかったような気がしたんだよな。

そしたらあっちから手を出したって本当の事を伝えて、なんとか納得してもらおうか――。

「まあ、成るようにはか成らないわよ。考えすぎても……あら？ 雨かしら？」

「ごちゃごちゃ考えていると、メルトにそう締め括られた。確かに考えすぎもよくないが、行き当たりばったりも危ないと思う。」

しかし、急に雨が降りだした。

さっきまで晴れだったのだが、わりと本降りの雨が降っている。ちよつと不自然だ。

「しんしんと……」

急な雨に驚いていると、ガジルの吹っ飛ばされた方から一人の女性が歩いてきた。

傘と青いロシア系の服を着て、胸にはてるてる坊主が付いている。これまた見覚えがあるような、ないような……。

「ジュビアね。彼女も原作の主要キャラで、妖精の尻尾よ。確か水の魔法を使ってた気がするわ。ちなみにヤンデレ系よ」

「本当に女子は結構覚えてるんだな……」

女子の情報はガンガン出るな、メルトは。

それにしてもこの場にいるという事は、ガジルと一緒に依頼を受けていたのだろうか。だとするとガジルを倒した事で、このままジュビアに誤解を与える可能性がある。

最悪、このまま連戦になりかねない。

「ジユビアは雨女。貴方達ね？ ガジル君にあれだけダメージを与えたのは」

早速突っ込んできた。しかし感情が読み取りにくい目をしているな。

怒っているかも判別が出来ない。

「そうなんだが、実は——」

「言わなくても分かるわ。大方、ガジル君が貴方達に喧嘩を吹っ掛けて、返り討ちにあつたのでしよう？ 同じギルドのメンバーとして彼の蛮行を謝るわ」

こいつ、一部始終を見ていたのだろうか。状況の把握が完璧過ぎだろ。

いや、ガジルがいつも同じような事をするから、簡単に予測が出来たのか。

「その通りよ。それで貴方は私達をどうするつもりなのかしら？ あの鉄臭い男の仇討ちでもする？」

メルト。挑発止めて。

メルトの言葉にジユビアは眉がピクリと動いたが、特に攻撃はされなかった。良かった、冷静な子で。

「……いえ、そのつもりはないわ。ガジル君の場合は自業自得だろうし、それに彼は頑丈なもの。それよりジユビアとしては一つ言っておかないといけない事があるわ」

「言っておく事？」

「貴方達、三人、私達のギルドに入らないかしら？」

ジユビアが言うには、ギルドのマスターが今強い魔導師を探しているらしい。それで仕事に行くギルドメンバーは全員強い魔導師がいたら声をかける事が義務づけられているとの事だ。

そういつた事で、三人がかりとはいえギルドでも相当高い実力を持っているガジルを倒した俺たちに声をかけたらしい。

ちなみにガジルはダメージを負ってはいたが、ピンピンしていた。怪物かあいつは。

それで勧誘を受けた俺達だが相談の結果、妖精の尻尾に入る事にした。

どうせなら物語を間近で体感したいし、何よりも生きていくには金がいる。

ギルドなんて簡単に入れないだろうし、この勧誘は渡りに舟だ。メルトは原作の女子に会えると喜んでいたが。

という訳でガジルとジユビアに案内され、ギルドに向かう。意外と近かったようで、半日もしないでついた。

途中ガジルからは睨まれ、メルトも挑発し、いつ喧嘩が起こってもおかしくなかったが、なんとかギルドが視認出来る距離まで近づいた。

しかし、いざ目で見ると、ギルドが思っていたよりもデカイ。まるで城のようだ。

ジヨジヨも何か違和感を感じているらしく、何かジユビアと話している。

「……知っているギルドの外装と違うのだが、こんな形だったか？」
「ここは支部。貴方が言っているのはおそらく本部」

そんな違和感を残しながら、五人でギルドまで向かう。

そしてギルドの入口まで行った時、その違和感の正体に気がついた。正確には、入口の看板を見て気がついた、

「……」

「……」

「……」

「？ どうしたのかしら、三人とも。急に口を開けて固まって」

「なあジュビア……聞き忘れていたが、お前達のギルドの名前って……」

「……そういえばまだ言ってなかったわね」

「『幽鬼の支配』よ。ようこそ」

看板には『FAIRY TAIL』ではなく、『PHANTOM L
ORD』と書かれていた。

まず話すべき

俺達がこの世界に来てから、早いものでもう三か月になった。

最初こそ一悶着あったが、今ではギルドにもなじみ、順調に仕事をこなしている。

また戦闘経験も積み能力の扱いも慣れ、三人とも確実に強くなっていく。俺も中級呪文は使えるようになったし、上級呪文もいくつか使えるようになった。

異世界での生活も至って順調だ。

ただ問題があるとすれば……。

「妖精の尻尾(ケツ)共が調子乗りやがって……次会ったぶっ殺してやる！」

「しかし協定のせいで出来るのせいぜい小競り合いぐらいだからなあ」

「一回デカイ戦争してえよな！ な！ キヨマロー！」

「ソーデスネー」

うちのギルド妖精の尻尾——つまりは主人公サイドと滅茶苦茶仲間が悪いんだよなあ。

しかもうちのギルド——幽鬼の支配者のやり方は多少強引な所があったり、周囲への被害が大きかったりと、完全にこちらは悪役の立場だ。

今飲んでいるギルドの酒場にいる仲間達も、口が悪かったりガラが悪かったりと、なんか三下つぽい。まあ悪人と断定できる程ではないが、悪い意味でアホが多い。依頼人を脅して依頼料を上げるとかアホ過ぎる。そんな事をすれば次から仕事がなくなるのが分からないのだろうか。

とりあえずそういった脅迫行為はギルドマスターに言つて辞めさせたが、口が悪いのと妖精の尻尾への敵対意識は変わらない。どうに

もマスターが敵対意識を煽っているような気がする。

そんな敵対意識と今後妖精の尻尾に入るガジルとジュビアがいる事から、幽鬼の支配者はそのうち妖精の尻尾と戦い、そして負けるのだろう。そのままガジルとジュビアは妖精の尻尾に吸収されて、めでたしめでたしと言った所か。

……俺達主人公サイドと戦って、無事でいられるかなあ。

幽鬼の支配者を妖精の尻尾と間違えたとき、本当は入るのを止めようと考えていたのだが、何故かギルドマスターのジョゼに気に入られてしまい、入らざるおえなくなってしまった。彼も妖精の尻尾に対抗するために優秀な魔導士を集めていたようなので、逃がす気はなかったのだろう。

実力的には三人がかりでも敵わないで、ジョゼに会った時点で幽鬼の支配者に入らない選択肢は消えてしまった。

「ん？ どうした、キヨマロ？ なんか女の事でも考えてるのか？」

ボーっと今までの経緯を考えていると、隣に座っていた奴が話しかけてきた。顔がニヤニヤとしているので、心配というよりかはからかいの意味合いが強いだらう。

「違うから。ただこれからの事を——」

「そりやそうだ！ お前は風俗に誘っても来ねえしな」

「男の方が趣味か？ ギャハハハハ」

あとこいつら下ネタ好きすぎ。高校生か。

「あーもう！ うっさいわね！ もう少し静かに酒飲めないの！」

そんなやりとりをしていると、メルトが怒鳴りながら近づいて来た。

なにやら機嫌が悪そうだ。

「おーメルト。ご機嫌斜めみたいだな。俺が慰めてやろうか？ これでも俺テク——」

下ネタを最後まで言えずに、俺の隣の奴がメルトに蹴り飛ばされた。

そのまま吹き飛ばされ、壁にめり込み動かなくなった。まあ死んではいないだろう。

「不潔。死んで」

「流石メルトさん！」

その所業に女性のギルドメンバーは歓声を上げ、男のメンバーも手を叩いてまくしたてる。

恰好はスタイリッシュ痴女だが、メルトは結構人気があった。

そんな歓声にもメルトは不機嫌そうに鼻を一回ならすと、吹き飛ばされた奴が座っていた俺の隣に座る。

そのまま俺がまだ手を付けてなかったグラスを両手で掴み、グビグビと飲み始めた。

「それ俺の酒なんだけど。で、何かあったのか？ またギャンブル負けたか？」

ギルドで安定して金を稼げるようになってから、メルトはカジノに入り浸るようになった。

基本負けてはいるが。

「いいじゃないこれくらい。それより聞きなさいよ！ 今回は勝ちそうだったのにあの女——」

話をまとめると、今回珍しく勝っていて調子に乗っていたところ、エリーとかいう金髪巨乳の女とルーレットで勝負する事になったらいいのだが、このエリーとかいう女がまた強運の持ち主だったらしい。瞬く間にメルトは勝ち分を失い、一気に取り返そうとして貯金まで崩したが結局は惨敗。

今やメルトは今月の家賃も払えないようだ。

「……軽い気持ちで聞いていたが、それやばくないか？」

「だから仕事行くわよ。高額なやつ」

そう言っつてメルトは依頼書を目の前に突き出した。

報酬は七千万プラスおまけ。これなら家賃なんて余裕だし、しばらくは遊んで暮らせる。しかし――。

「呪われた島ガルナ島の解呪つてこれS級クエストじゃねえか」

「私達もう資格あるからいいじゃない。折角暫定S認定貰ったんだから使わないと損よ」

俺達三人は、マスタージョゼから暫定S認定を貰っていた。

普通S級クエストは限られたS級魔導士しか受けられないのだが、俺達は暫定でその資格を貰っていた。手放さない為の措置なのだろう。

「しかしなあ……これは原――」

作のイベントだぞ。と言おうとしてメルトに顎を蹴られた。

あ、これ意識失う。

「あーもう面倒くさいから気絶させて無理矢理連れて行くわ」

無茶苦茶だ。

薄れゆく意識の中、俺はそんな事を考えていた。

「え？ これ原作のイベントなの？ 何で言っつてくれないのよ」

「言おうとしたらお前が気絶させたんだろうが！」

気を失った俺はそのまま列車に連れ込まれ、メルトと共にガルナ島に向かっていた。目を覚ますともうガルナ島への船が出る港町のハ

ルジオンの近くだった。メルトの奴、相当な力で蹴ったな。

ちなみにジヨジヨはいない。二人の方が取り分が上がるからだそう
うだ。

「まあいいじゃない。別に世界を左右するようなものではないんで
しょう?」

「そうだが……てかお前、この列車代俺の財布から出したな? やけ
に財布が薄くなっているんだが」

「報酬貰ったら色をつけて返すわよ。それより、これはどんなイベン
トなのよ」

こいつ……人の財布から金パクっておいて、悪びれる気がないな。

「……記憶は曖昧だが、なんか封印されているデカイ悪魔がいたな。
それで悪魔復活阻止のために戦って……でも最後島民は悪魔になっ
ていたな」

「何それ? 最後に悪魔になるの?」

「全部終わった後島民と妖精の尻尾のメンバーで悪魔の宴とかやって
いた気がするんだよなあ……。あんまり自信ないけど」

なんか宴で空を飛びまわっていた気がする。あと月の呪いがどう
とかも言っていた気が……。

「使えないわねえ……。ん? ちょっと待ちない。この依頼はもう私達
で受理しているのだから、もう妖精の尻尾は依頼を受けられないん
じゃない?」

「ああ、それは確かS級じゃない主人公が勝手に依頼受けるから、多分
かち合うぞ」

「呆れた……物語的には面白いんですけど……着いたわね」

そうこうしている内にハルジオンに着いた。

あとは島まで行く船を探すだけだ。

「ガルナ島？ 冗談じゃない。無理だ」

「名前も聞きたくないのだが……この前の小僧達といい、なんだってあんな島に……」

しかしこれが難航した。

呪いを怖がり、ガルナ島まで行ってくれる船が全く見つからないのだ。

しかも妖精の尻尾の面々は既に島についているようだ。もし先に依頼を達成してしまえば、こっちは移動費分で大損だ。

「どうする？ このままじゃマズいぞ」

港から海を見るが、ガルナ島の形も見えない。泳いでいくのも難しそうだ。

「……仕方ないわね。これは生理的に使いたくなかった手段なんだけど……」

「ちよ、おい」

メルトは心底嫌そうな顔をしながら海に飛び込んだ。

慌てて海をのぞき込むと、巨大な木造船が海の中から飛び出してきた。会場から飛び出た衝撃で船が揺れ、その艦首に右手の中指にフツクのようなものを装備したメルトが立っている。

「換装：『海賊紳士（エドワード・ティーチ）』」

「宝具：アン女王の復讐（クイーンアーンズ・リベンジ）」

「さ、行くわよ」

これは黒ひげの船の宝具だ。まさかこんなものまで使えるとは。

縄梯子が勝手に下りてきたので、そこから船に乗る。

乗り込むと勝手に錨が巻かれ、帆が下りてきた。どうやら船の物はメルトの意思で勝手に動くようだ。

「凄いな。こんな奥の手があるなら早く使ってくれよ」

「黒ひげのキャラが少しね……この姿になってからああいったキャラ

がどうにも苦手なのよね」

「じゃあ同じ海賊のドレイク使えばよかつたんじゃ」

「FGOで持ってなかつたのよ。馬鹿。死ね」

なんかめっちゃデイスられた。

そのまま順調に進んでいき、とうとうガルナ島が付近までたどり着いた。あと数分でガルナ島の海岸につける筈だ。

時間はそれなりにかかってしまって、もう日が落ちて、月が昇っている。夜の海の航行は危ないが、この距離ならもうガルナ島に行つた方が良いだろう。

「ん？　なんか島の海岸が騒がしいな？」

ここからでは良く見えないが、人影が数人見える。

しかも何か戦闘をしているようだ。

「妖精の尻尾の連中——って何この波!?!」

気づくと船が渦潮と高波が混ざつたような波に巻き込まれていた。

これ船が沈みそうだ。

「自然こんな波ないだろ?!　魔法か?」

「どこの誰だか知らないけど、先制攻撃とはやつてくれるじゃない!」

「とりあえず空に逃げるぞ!　フエイ・ファルグー!」

船が持ちそうになかつたので、俺の呪文で二人を浮遊させる。飛行しているわけではないので、一時しのぎにしかかわないが。

船は俺達が浮かぶと同時に船が消えた。船が横転する前に、メルトが消したのだろう。

「換装：『第六天魔王（織田信長）』」

「誰に喧嘩を売ったか思い知らせてやろうじゃない……」

それと同時にメルトの周辺に大量の火縄銃が出現した。その銃口は全て海岸の方を向いている。

「おい！ ちよつと待——」

「宝具：三千世界（さんだんうち）！」

すべての火縄銃が、海岸に向けて鉛玉を打ち出した。